ノルベルト・エリアスにおけるサバイバルユニットとスポーツ

坂　なつこ　一橋大学大学院社会学研究科教授

はじめに

社会学者N. エリアスは、今日、「個人」という概念は、次のような機能を表しているとする。すなわち、「全世界のすべての人間は自分で自分を規制する自律的な人間であるか、またそうした人間であるべきであることを。そしてまた同時に、すべての人間はある点ですべての人間と異なっており、(中略) 異なるべきであることを」(エリアス、2000年［1987］176頁)。このような個人のイメージは、現代社会からみれば自明なものと考えられるだろう。個性の尊重であったり、「本当の自分を探す」ためのアイデンティティの追求は、ポジティブなものと捉えられる。また、自分を律することに長けている人や、「他人に迷惑を掛けない」という言い方は、よい社会人としての当然のマナーのように使われる。かつての地域共同体や家族制度が変化するなかで、「誰にも頼らず」に自立した個人が生きていけるよう、さまざまなシステムや制度の構築も求められている。社会的距離やコミュニケーション技法も変化するが(ソーシャルネットワークサービスなどはその例であろう)、一方でより孤独感が深まったり、社会生活が立ち行かなくなるケースも生じてくる[1)]。それに対し、従来の血縁や地縁とは異なる人々のつながりが生じたり、関係性がより緊密になっていく。

地理的な距離が縮小し、人の流動性が高まることで、多様なコミュニティが混在する現代社会において、他方で、なぜこのような「孤立した個人」像は生じるのだろうか。前者はグローバリゼーションと呼ばれる現象であり、人々は、新しいつながりを模索している。スポーツは、その「つながり」を形成する一つのツールとして取り上げられ、「きずな」を深められる (あるいはつくることができる)ツールと期待される。だが、なぜスポーツはそれを担うことができるのか。

なぜなら、スポーツは、抽象化、数量化など、普遍化されたコードとして、時空を越えた相互結合を常に意識させる「幻灯劇」であり、スポーツの現場は、常にそこに居ない人を想像させる、グローバルな経験の構成要素の一つなのである。それは、「近代が、システム社会に編入されるとともに、同時にそこから離脱する傾向をもつ、二面性に生きる民衆の文法を調整する装置」としてスポーツが「発明」されたからである[2)]。人々がスポーツを楽しんだり、スポーツを通してつながることができると感じるためには、コード化された身体技法の習得と理解、具体的な実践 (ローカルな経験) の読み替え (グローバルな経験) が必要となる。私たちの経験する社会や個人像は、そのため、単なるローカルでも、システム化するグローバリズムだけでもない、重層化する過程から読み解く必要がある。本稿では、このような個人像・社会像の全体図の把握のために、エリアスの社会科学的方法論を概観する。とりわけ、エリアスが1980年代以降によく言及したとされる、「サバイバルユニットsurvival unit (s)」の概念についてとりあげる。1990年に死去したエリアスが、直接に「グローバリゼーション」という語に言及している箇所はほとんど見られないが、ロバートソンが指摘するように、近代西欧社会における個人的、社会的構造の変化を捉えたエリアスの研究はグローバリゼーション研究に連なると考える[3)]。

1．より高次な統合の過程とサバイバルユニット

人類humanityとは、人間諸社会の全体、す

なわち、すべての多様なサバイバルユニット―親族、部族、あるいは国家という性質をもつ―が相互に関係して形作る、今ある（ongoing）フィギュレーション過程を表すための、もう一つの言葉に過ぎない。かつて、人類という用語は、しばしば社会科学的探求の範囲を超えたこじつけの理念のシンボルであった。しかし、こじつけではもうない。理念でもない。すべての異なる部族、世界のすべての国家が、一層緊密になっている時に、人類という言葉は、過去だけではなく、現代の社会発展の諸相について、ますます純粋に事実を示す、社会学的参照枠を提示するようになっている[4)]。

エリアスは、19世紀の社会学において、社会としてのモデルとなったのは明らかに国家であり、「人類Menschheit」という概念が、「社会学の枠組みとしては余りに曖昧」であり、「啓蒙主義的理想の不快な臭い」が付着した語として捉えられていたとする。社会学の初期段階において、そのモデルは確かに現実に適合的であったが、世界の国家が多かれ少なかれ相互に依存している現代社会においては、異なる社会モデルが必要である。国家間の相互依存とは、プラスの関係だけではない。例えばエリアスは、冷戦期における核戦争の危機について、二重拘束（ダブルバインド）という言い方で、むしろお互いが強く結びついていたことを説明する[5)]。そしてそれによって、関係する周辺国家、地域もその関係性のなかに投げ込まれているのである。

統合のレベルの方向は、もちろん反転することもありうると認める一方、「・・・現在は、人類のより堅固で広範囲におよぶ統合へ向かう方向が優勢である」と指摘する（エリアス、2000［1987］184頁、186頁）。さらに、「私たちは、もはや個々の国家ではなく、人類の国家集団が有力な社会単位として、つまり社会として理解されるもののモデルとして、また多くの社会科学研究の準拠枠として使われねばならない時代を迎えるのである」とする（エリアス、2000［1987］185頁）。

人類という概念は、19世紀のいわゆる知識人の理想を表したものでは既になく、相互結合と相互依存が地球規模で拡大する過程を反映した、現実的な概念になる。繰り返すが、この場合も、肯定的な意味での協力関係や情緒的つながりだけを意味するわけではない。ここで、エリアスは、その過程を理解するために、サバイバルユニット（生存単位）という概念を用いる。サバイバルユニットとは、端的に「生活に不可欠な保護機能を担保する統合単位」（山下、2002、369頁）ということができる。エリアスは、「それに所属する大半の人間の意識において、われわれアイデンティティの他の階層のどれよりも強く、人間集団の対決や自然災禍の場合に、かれらの身体的かつ社会的な安全を左右する保護単位」（エリアス、2000［1987］234頁）であると説明する。統合レベルが低次から、すなわち、部族単位や家族単位から諸国家や諸社会へと、徐々に拡大する。

『シンボル理論』の編者であるキルミンスターは、エリアスは『社会学とは何か』においては「攻撃と防御の単位 attack and difence units」を使っていたが、後年「サバイバルユニット」を好んだとしている[6)] サバイバルユニットは、「自分たちの生活と集団の生活を他の集団の攻撃から共同で防御するために、あるいはまたさまざまな理由で他の集団を共同で攻撃するために、人々を連合させる」ことが課題となる。そのため、この連合の主たる機能は、「他の集団による物理的破壊からの防御」と「他の集団の物理的破壊」であり、その機能は不可分である（エリアス、1994［1978］166頁）。そしてその連合が集団内の独特な相互依存関係を生み出すとする。近代国民国家は、国民に生活と安全を保障するサバイバルユニットとしての性格をもつと同時に、戦争の際に死ぬ義務を求める要素を持つ「絶滅単位」という「二分裂的性格」を保持するのはこのためである。それに対して、国際連合やEUといった国民国家より高次の統合単位が存在するが、「攻撃単位」としての軍隊が存在しないために、それらは未だサバイバルユニットとしての機能を持ち得ているとはい

えない[7]。

2．「諸個人」の社会

サバイバルユニットは社会構造の側面であるとすれば、その変化は人格構造、個人的側面にはどのように説明されるのか。

エリアスは、「部族は世界のいたる所で、自分自身で統治する自主的な生存単位（サバイバルユニット）としてのそれの機能を失う。多くの国家は人類の統合が進む中で、その主権を著しく失う」と説明し、その意味では、個人もまた、「社会との関係の中で、統合のそうした過程に基づいて、まずもって権力行使の機会を失う」とする[8]。このような捉え方は、エリアスが個人の自由について軽視しているような印象を持ちうる。しかし、それに対して、エリアスは、「個人の自由に対する社会的制約についての伝統的かつ哲学的な討論は、人間の本性と関係した人間の自由（理想が付加された）論究に限られ、それも通常、まったく思弁的に、元の本性的特性についての生物学的知識の状態をほとんど考慮にいれることもなく行われた」と批判する（エリアス、2000［1987］187頁）。個人の決定の余地が制限される度合いは、ゼロサムではなく、そのバランスにあり、他者（自己も含め）からの制限のある状態の存在は、社会的存在である人間の生物学的特性の一部であると、エリアスは捉えている[9]。

この点について、人間がまったく自立して存在することは、ほとんど不可能であり、「諸個人」すなわち社会的存在として捉えることを重要な社会学の課題とするのである。エリアスは、「多数の個人は、相互の基本的な志向性、信頼性、依存性によってさまざまなかたちで相互に結合し、それによって多少とも不安定な権力バランスを伴う相互依存ネットワークもしくは関係構造（figuration）－例えば家族、学校、都市、社会階層、国家－をさまざまなかたちで形成している」（エリアス、1994［1978］3頁）と説明する。ここでは、社会学の用語やそれに基づく概念の不備が指摘される。「（中略）科学的省察のレベルに移行するや否や、すべての社会的構成物を『私の』『君の』『彼の』さらには『われわれの』『君たちの』『彼らの』と言う可能性は無視されてしまう。そのかわりすべての構造物が、自分という人間だけでなく個々の人間すべての外部のあちら側に存在するかのように、語られるのがふつうである」（エリアス、1994［1978］5頁）。科学的省察における社会構成物の物象化と非人間化は、一般的な言葉や概念に依って促進され、独特の、社会構成物の形而上学にまでいたったのである。そこに密接に関係しているのは、「物理－化学的な自然界の連関の科学的解明の中で発達し定評を得てきた思考や言語表現の様式を、当然のことのように諸個人の社会的連関の解明に転用しようとする態度である」（エリアス、1994［1978］6頁）として、「諸個人から形成される社会的な関係構造（figuration）の特色をより正しく表現する別の言葉や概念を徐々に開発していくこと」（エリアス、1994［1978］8頁）もまた、社会学にとっては重要な課題であるとする。

3．WE-I（われーわれわれ）アイデンティティのバランス

冒頭でも言及したように、諸個人として存在するにもかかわらず、相互依存と結合が拡大する現代社会において、その自己像はますます、社会的側面から切り離されるように感じられる。それはどのようにして生じるのか。

山下（2004）を参照して、そのメカニズムを概観する。

相互結合と依存の連鎖は、人々の織りなす関係構造のなかで異なった水準で統合されるが、その際、相互依存関係の安定化のために、「衝動のモデル化」がすすむ。すなわち、その関係において、正しく行動するための心理装置が各水準の単位毎に生み出される。これを媒介し、個人は自己抑制を内面化し、行動の均質的な規制が生じる。この点について、エリアスは、物理的な環境が平定す

ることを重視している。路上の喧嘩を例に、突然襲われるというような危険性が減少して初めて、人々の情動は長期的に安定した状態を維持できるようになると述べている。

社会の側では、諸個人は、それぞれの水準で統合される単位のもとで生活を営むので、それぞれの単位が諸個人の生活や認識の準拠枠になる。このことにより諸個人は、アイデンティティを統合水準に結びつけ、アイデンティティはこの統合単位に基づいて範囲や内容を規定される。これが、エリアスがWE-I（われーわれわれ）アイデンティティと呼ぶものであり、そのバランスのありようが、「国民性」などと称される。ここにおいて、成員は国家への強い帰属が求められるし、同様に求めるといえる。そこでは、社会的な記憶としての文化財（神話、歴史）としての一貫したアイデンティティが生成される。いっそうの統合圧力により、諸個人におけるアイデンティティや社会的体質（エリアスは、ここでハビトゥスすなわち「第２の天性」と表現している）が形成されるのである。エリアスはこのようなバランスを「対照の幅の縮小」が進むことであると表現する。他方で、そのなかにあって、「変種の増大」は、統合単位の多層化と機能分化によってもたらされる。

前述したように、諸個人は統合単位ごとの位相で存在する社会的結合様式に規定され、自己の社会的体質を形成するが、多層的な水準で存在するにいたる統合単位の元では、自己の社会的体質も多層的に形成される。例えば、エリアスは「リバプール＝イギリス人」という表現で、最高位の統合単位としてのイギリス（国家・国民性）のなかに下位の統合単位と結びついた変種が多様にあらわれると説明するのである。同様に変種は、機能的結合として水平に存在する結合単位との結びつきによっても表れる。近代の個人化の進展はこの結びつきを多様に進めるのであり、趣味によって結ばれる「趣味縁」や、サッカーサポーターによるコミュニティ意識の形成などは、このようなものにあてはまる。また、さまざまな社会問題による横断的な共同体が作られるという点も重要であろう。

おわりに

人々の相互結合と相互依存が緊密化し、拡大する一方で、身体の有り様は変化するといえる。エリアスは、ダニングとともに、近代スポーツの発生を「文明化の過程」に見出すが、それは、「社会構造や人格構造の特殊な変化」のもとであらわれた、情動規制や暴力抑制の進んだ社会の昇華的欲求が生み出したものであるからである。さらに、それが一地域や一国にとどまらず、「イングランド型のスポーツが比較的早く他の国々に受け容れられたことは、多大な昇華の技術を要求し、より厳しく規制され、暴力行為のより少ない、しかも楽しむことのできるような競争的肉体行使の必要性が他の国々にも存在していたことを示す」（エリアス、1995［1986］34頁）。このように、エリアスにとって近代スポーツの発生は、もう一つの「文明化の過程」の実証的展開の場であったといえる。

他方でこのことは、マナーの歴史が示しているように、身体技法のコード化も意味している。エリアスは、西欧社会において、諸個人の相互依存がますます緊密になる様相を編み合わせ（フィギュレーション）と呼び、それに伴い個人が自己の情動や衝動の抑制（自己抑制）を強いられる過程を「文明化」とした。緊密になり重層化する相互依存関係は、人間の行動様式ややりとりの一層のコード化を促す。安全で長期的な視野が可能になるからこそ、そしてそれらを一層進めるためには、行動や情動のパターン化、コード化が進展するのである。マナーは一層洗練化し、粗野な行動は回避される。システムが安定するとともに、インターフェイスのパターン化はすすみ、直接的なやりとりが回避できるようになるが、相互結合と相互依存の緊密化は背後に隠れ、それぞれの個人はますます自律しているように感じられる。肉体的暴力は、象徴的暴力に置き換わり、行使だけではなく、見ることも好まれなくなる、あるいは禁止される傾向になる。エリアスは、「近代が、システム社会に編入されるとともに、同時にそこか

ら離脱する傾向をもつ、二面性に生きる民衆の文法を調整する装置としてスポーツを『発明した』のである[10)]。

グローバリゼーションの進展は、「脱埋め込み」されたコードの共有を通じて、コスモポリタニズムへ向かう可能性を示してきた。スポーツは、抽象化、数量化など、普遍化されたコードとして時空を越えた相互結合を常に意識させる「幻灯劇」であり、スポーツの現場は、常にそこに居ない人を想像、グローバルな経験の構成要素の一つでもある。それらを通して、私たちの「われーわれわれ」アイデンティティは、つねに流動化し、差異化され、サバイバルユニットとしてのコミュニティは形成されていくと考えられる。

犬飼は、エリアスが1977年にドイツ・アドルノ賞を受賞するなど、社会学者として「再評価」される時期に着目している。「個人」に力点を置いた理論家が注目を浴びる時代に、「個人」は「諸個人」としてしか存在し得ないとエリアスは説いていることに重要性を見出す[11)]。エリアスは、社会科学や社会学の概念や用語が「現実適合」的ではないことを指摘し続けたが、グローバリゼーションの経験により、ますます「個人」から出発する概念の限界を突きつけられているともいえる。

「個人」の側面からいえば、グローバルな収奪への対抗としての「現場」「ローカル」は常に「足場」として存在する。それは、生活圏としてのサバイバルユニットとも考えられる。グローバル化によって創出された多様な主体や、それに基づくコミュニティを「生活圏（サバイバルユニット）」という新しい概念で捉え直すことが必要となるだろう。サバイバルユニットという分析枠組みの精査はもちろんのこと、今後の課題としては、それに関わるスポーツシステムの枠組みを抽出し、グローバル化、多様性、ネットワーク、当事者性といったキーワードを精査しつつ、地域やアイデンティティによってつながる共同体（identity based community）などによるスポーツ実践の諸相を丁寧に考察することである。

【注】

1）公的扶助制度においても、このような個人像が出発点となるために、まずは自助努力が求められる。「新しい公共」というスローガンに描かれているのは、このような個人像であろう。自立していることが前提なので、そもそも自立することが困難な状況に置かれている者は、公的制度からも排除される傾向にある。

2）山下高行「『まじめの支配』と近代スポーツ」『スポーツ文化を学ぶ人のために』井上俊・亀山佳明編、世界思想社、1999年、264頁。

3）R. ロバートソン『グローバリゼーションー地球文化の社会理論』阿部美哉訳、東京大学出版会、1997、167頁。

4）ロバートソン、163頁。訳は改訂した。N. Elias, The Retreat of Socilogists, *Theory, Culture and Society*, vol.4, 1987, p.244.

5）N. エリアス『参加と距離化』波田節夫・道籏泰三訳、法政大学出版局、1997年［1987］110頁。元々は、G. ベイトソンの用語から借用するとしている。同上書67頁。

6）N. エリアス『シンボルの理論』大平章訳、法政大学出版局、2017年［2011］17頁の原注参照。N. エリアス『社会学とは何か』徳安彰訳、法政大学出版局、166－167頁。邦訳は攻守単位である。

7）L. Bo Kaspersen and N. Gabriel, The importance of survival units for Norbert Elias's figurational perspective, *The Sociological Review*, 56: 3, 2008, pp. 370-387.

8）N. エリアス『諸個人の社会』M. シュレーター編、右京早苗訳、法政大学出版局、2000年［1987］185－187頁。訳は改訂。邦訳は残存単位である。

9）例えば、「知識の宝庫」という言い方で、言語や社会的慣習の習得にとって、生まれ落ちた環境がいかに生存に重要かという点について繰り返し議論をしている。特に、『シンボル理論』に詳しい。

10) 山下高行「グローバリゼーションとスポーツ ーノルベルト・エリアス、ジョセフ・マグワィアの描く像」『近代ヨーロッパの探求８（望田幸男・村岡健次監修）スポーツ』ミネルヴァ書房、2002年、264頁。エリアスが「社会の飛び地」と呼び、ダニングが「男性性の保護区」としたスポーツであるが、近年、ますますそのコード化は進展している。例えば、身体におよぶ傷害への管理に関わる反則の強化、選手らの健康の管理など。他方で、エクストリーム系やフリースタイルなどの拡大は、その二面性の存在を示しているとも考えられる。

11) エリアスは、カント哲学からの伝統である理性や啓蒙の哲学や、ウェーバーによる方法論的個人主義、パーソンズらを強く批判した。犬飼はまた、エリアスと同様、個人と社会が別個のものであるような社会科学的用が現実のそぐわず、形而上学を無為に発展させてきたと批判している。犬飼裕一『方法論的個人主義の行方―自己言及社会』勁草書房、2011年、359頁。